

「滑落の登山男性救助」の見出しで、「十三日午前五時半ころ、静岡市内の男性公務員（六九）の家族から、十二日に日帰りで同市奥仙俣のアツラ沢頭に一人で向かったまま帰宅しないと、男性の家族から一一〇番通報があった。静岡中央署や同市消防本部が捜索を行い、十三日午後二時十五分ごろ、同市入島の山中の沢で、全身を強く打って怪我をして動けなくなっていている男性を発見、救助した。男性は十二日午前五時ころ、車で自宅を出発。入島の三郷川沿いの林道に駐車した後、沢に沿った山道に入ったが、滑落したという。男性は駐車した場所へ自力で戻ろうとしたが、途中で身動きがとれなくなった」という記事が一月十四日静岡新聞の社会面の片隅を埋めた。読売、毎日、中日の各新聞にも同趣旨の記事が出た。中には住所、氏名のみならず職業まで明記した記事もあった。

(一)

冬の日没は早い。午後五時を廻るとみるみる明るさが闇に奪われて行く。午後六時過ぎ、夕飯の都合もあるので育代は「何時ころ帰る」と栄治にメールを入れた。三十年以上も山登りを続けている夫のことであり、殆ど毎月のように山に入っていることで遅くなることには馴れているので、返事がなくてもあまり気にならなかった。午後八時を過ぎても何の連絡がない。こちらからのメールは通常に送信されている。まさか栄治の携帯電話が通信圏外にあるとは思わなかった。午後九時を過ぎて、たしか日帰りの予定で出掛け、明日は仕事があるはずなのにこの時間まで連絡がないのはおかしいと思った途端不安が胸にこみ上げてきた。

車で十分ほどのところに住んでいる娘の美和に電話してみたが、美和もまた大事を感じることなく「もうじき帰ってくるんじゃないの」と受け流していた。今までにも栄治は山の中にビバークして早朝に下山して帰宅したことや夜中の一時過ぎに帰宅したことがあったのだから美和がそう思うのも不思議ではない。しかし、育代から午後十時を過ぎて再び電話があったとき、美和も栄治の身に何かあったのかもしれないという不安に襲われて育代の所に駆け付けた。

育代は昨夜栄治から「明日は去年登った山で落とした手袋を探しに行く」とは聞いていたが、二人共それが何処なのかはさっぱりわからない。日ごろから二人共山に対する興味は殆ど持っていなかった。栄治の日記を探して昨夜のページを探すとそこには「明日の山行、アツラ沢へもう一度」と記されていた。二人共、アツラ沢が何処にあるのか見当もつかない。美和がインターネットでアツラ沢を検索した。栄治の山のパートナーである塩沢ドクターは暮れから体調を崩して今回の山行には参加していない。何かの情報は持っているに違いないのだが既に午前一時に近くとても電話できる時間ではない。外は雨である。山では雪になっているに違いないと二人は思った。

(二)

栄治の長男真志は、昼間焼津方面の天文台公園や海岸に子供三人を連れて行って疲れてしまい、八時半ころには床に入ってしまった。しかし深夜に目覚めてしまいその後何故か寝つかれずパソコンのキーを叩いていた。長く勤めてきた父が、後一ヶ月で停年なんだなど取り止めもない思いを巡らしていた。

まさか当の栄治が、奥深い山の暗闇の谷底で岩壁にへばりついてうずくまり、対岸の岩に降り積もる雪の厚さが少しずつ増して行く様を、半ば眠り半ば醒めながら夜明けを待っているなどとは露ほども思わなかった。

寝ついたと思ったら電話のコールで起こされた。まだ五時半である。

「お父さんが、昨日山に行ったりまだ帰って来ない。警察へ連絡した方がいいだろうか？」と切迫した声が受話器の奥から響いて来る。「塩沢先生にも警察にも直ぐ連絡した方がいい」と応えて厚手のセーター、ズボンを着込んで車に飛び乗り草薙の家に向かう。着いて三人で相談しているとところへ六時過ぎ塩沢ドクターが到着し、湯の森二万五千分の一の地図で昨年と同じコースならば、湯の森バス停付近から林道に入りそのどこかへ車を置いて山に入った可能性が高いと結論付けた。ここでは山岳トラブルであることは明白な前提事実であった。

そこえ間もなく清水警察署員二名が到着した。搜索の端緒は家出人捜

索からということで、栄治の性格、家族間の関係、仕事上の悩みごとなど山岳遭難と関係がないような事項も調書に記載されて搜索願を提出した。署員はそこから現地の梅ヶ島派出所に車の搜索方を連絡していた。車が発見されないことには山岳遭難としては搜索救助に着手できないのである。

手続き終了後直ちに塩沢ドクターと真志はそれぞれの車で湯の森に向かう。途中のコンビニでお結び、パン等を買う。自分の分だけ選んだ真志はふと、思い直して栄治の分も買い込んだ。県道梅ヶ島線の湯の森バス停付近から左折して林道に入る。林道は狭く、沢沿いの左側は崖でオフロード運転に慣れない真志は危険を感じ塩沢ドクターの車一台に同乗してなお奥に進んでいった。冬期は殆ど車が入っていないと思われた。

「普段はこんなに林道の奥には止めないですね。林道でウォームアップして行くと思うのですがね」などとドクターが呟きながら大きく左に曲がった時、目の前の植林の中に前向きに突っ込んだ見馴れた父の四輪駆動車が突然現われた。二人は思わず同時に「あった！」と叫んだ。時に午前九時十五分過ぎであった。ドアロックを忘れて車内には毛糸の手袋一双のほかに冬山用の手袋が右手だけ、それにスパッツが一組その他着替えの衣類等が後部座席にある。間違はなくこの山のどこかに栄治はいると二人は思った。湯の森のバス停付近に戻り、家と清水署に車の発見場所、車内の状況等を連絡する。この段階で家出人搜索から山岳救助に搜索の目的が変更され、静岡中央警察署の管轄となった。

(三)

午前十時、中央署から救助隊を組織して現地に向かわせるから待機するようにとの連絡があり、近くの民家の空地に駐車させて貰い車中で腹ごしらえをする。ここから見上げる空は狭いながらも晴れあがっている。気温も上がってきた。いまごろどこかの尾根を歩いているのではないか、もうじき下りてくるのではないか、この天気なら父は見つかるに違いない、いや見つかって欲しいと真志は思い巡らしていた。そのころ栄治は全身打撲と骨折を負いながら三郷川上流の沢を一步一步慎重に里に向かって下っていたのである。また家では育代、美和それに息子が未だに帰

宅していないことを知った九十五才になる栄治の母親のうめが、電話機の廻りにへばりついて連絡があるのを今か今かと息を潜めて待ちわびていた。

梅ヶ島派出所の駐在員が栄治の車の状況を中央署に連絡し、遺書のようなものはない、付近の崖下に転落した形跡もないなどと報告している。民家の主人がお茶をいれてくれ、「この山には部落の者は滅多に入らない。アツラ沢という名前も聞いたことがない。北尾根に荒れた小屋があるが、年に一度行くかどうか。景色も良くないし、登山するような山ではない。こんな山に登る理由がわからない」と言っている。山岳救助隊はなかなか到着しない。救助のための限られた時間がなす術もなく費やされていく。しかしひたすら待つしかない。

(四)

正午近くにいったん行きすぎたワンボックスカーが、駐在所前まで戻ってきた。山岳救助隊四名が乗車している。リーダーから「何の目的で登ったのか、七〇才に近い人が一人でこんな山に登るとは普通考えられない」と質問されて真志は、栄治が三十年以上山に登っていること、去年もこの山に登っていること、その時は北尾根から主稜線に出て南尾根を下っていると答え、塩沢ドクターも栄治の登山キヤリア、日本百名山を完登し、アツラ沢にも二人で登ったことがあると説明した。そのまま救助隊四人と地元の駐在員二名それに真志と塩沢ドクターが林道に入り、終点近くの広場で搜索の準備に取りかかった。しかし何処から登ったらいいかを決めかねていた。主稜線に登りつくには三郷川の左岸沿い(北尾根)、右岸沿い(南尾根)、沢を登るほか林道の入口付近から北尾根に取り付く四コースがあるがいずれにせよ道らしい道はない山なのである。栄治が好みそうな山だといっても塩沢ドクター以外には理解されないであろう。今日の搜索は時間的にこのうちの一つだけに限られている。

ドクターに促されて左岸の北尾根に取り付いてみる。とても道とはいえない所だ。途中の小さな岩場で救助隊のリーダーが地図上のポイントを確認している。やや平坦な場所で山に向かって「おい、おい」と呼びかけてみるが応答はない。その先にも手がかりは見当たらないので

再び広場に戻る。そこに警察犬を連れた民間人がやってきた。昼前に中央署から紹介されて育代が依頼したのだった。警察犬は栄治の車両内の手袋、運転席などの匂いを嗅いで沢沿いに山に入っていた。救助隊四人がそれを追う。更に中央署の車が到着し、地域担当次長と地域課長が降りて来て真志に「心配ですね。県警のヘリを飛ばします」と伝えてくれた。また今日の搜索は二次遭難の危険があるので、午後三時で打ち切られることも告げられた。

(五)

午後一時を過ぎて先ほどまで晴れていた空が山の上から次第に雲に覆われ、雪が舞い始めた。気温は急速に冷え込んでくる。真志とドクターは今度は沢を飛び石で渡り、急な沢を登り始めるが岩が濡れて滑りやすく、流水が行く手を妨げてとても登りにくい。かなり上まで登って見たが足跡は見当たらず危険なので引き返す。そのころ上空からヘリが「こちらら静岡中央署です。関さん、関さん貴方を探しています」と何度もスピーカーで呼びかけた。ヘリならば見つけてくれるとの思いも空しく、沢の上部は既にガスに覆われて沢筋は見とおすことが出来なかったのである。しばらくしてヘリは何の成果も無く引き返して行った。再び静寂に取り囲まれた真志の胸を不吉な思いが広がり始めていた。真志が中学のころ、何回か栄治に連れられて安倍奥の山に登ったことがあった。そのころの栄治は一般ルートを外して登ることは殆どなかった。だから最近の栄治が地図上に道もなく人が入らない山の奥深くに、一人で入り込んでいるとは考えたこともなかった。

時計の針はすでに午後二時を廻った。雪がちらついて山から吹き降ろす風は益々冷たい。先ほど課長から「今日の搜索は午後三時までで、沢に入った救助隊はそこで引き返す。明日以降は消防団や地元の人達と合同で搜索を続ける」と言われ、この冷え込みでは明日までは栄治の命は持たないだろうと思った。残り時間が少なくなってきた。状況は暗い。しかし救助隊の活動に最後の望みを託すほかない。何度も沢筋のガスに覆われた山を仰いで祈る。そして沢の岩場を往きつ戻りつしながら、午後三時を過ぎた後をどうすべきか思索する。

(六)

午後二時十八分、突然沢の中で大きな岩の上に立って操作していた課長の無線機が応答を始めた。一瞬、不吉な知らせかも知れないと思ったが覚悟を決めて近づいた。無線機を背中に背負った課長が「発見されました。沢にいたそうです。全身打撲で怪我をしているが、意識はしっかりしているようです」と叫ぶように告げた。救助隊四人は沢を登り途中から右岸の尾根に取り付くつもりだったが、道を間違えて沢を登って行ったら偶然発見したと説明される。今の今まで栄治が助かる可能性は殆どないのではないかと感じていた真志は、救出の報を聞いて咄嗟に息が詰まり「よかった。ありがとうございます」と課長に告げるのが精一杯であった。

救助隊から、当然のことながらその中には遺体搬送袋も用意されていた荷物は全て発見現場に置いて、栄治を交代で担いで下山すると連絡がある。指揮現場は直ちに救急車の手配を静岡中央消防署に要請した。ここは携帯電話が圏外なので、無線で発見の事実を家族に知らせる欲しいと依頼し、中央署からその知らせを美和が受けたのはかれこれ午後三時に近かった。電話機を囲んで最悪の事態も覚悟していた育代、美和、それに必ずしも事態が把握できていなかったうめも極度の緊張から少し解放された。しかし、どの程度の怪我を負ったのか、まだ状況は依然として不確定である。直ちに美和は夫の良と一緒にお茶や食糧などを買い込んで山に向かった。

(七)

救助隊が栄治を抱えて戻ってくるのを待つ間、真志は、中央署の次長、課長に、「九死に一生、いやそれ以上ですね。お世話になりました」と告げる。これに対し、警察の次長は、「時間との戦いだった。帰ったら単独登山は控えるようにきつく言った方がいいな」と言い放った。三時ころになって、救助隊員から、発見現場を三十分程下った辺りが河原になって上空が開け、ヘリでピックアップできそうなので再度ヘリを呼べないかと依頼があり、課長が出動方を連絡した。二十分くらいでオレンジ色のヘリが上空に到着し旋回し始めた。現場は沢の上流部であることを皆

で指示しそちらへ向かったが、しばらくして強風のためキャッチアップ不可能と判断したので引き返すと無線連絡を残して機体はそのまま南の空に消えていった。

四時過ぎ、消防署の四輪駆動車と救急車が広場に到着しその後ろから美和と良が来た。次長から「ヘリを二回飛ばしているので、マスコミから取材を受けている。名前が出ると思っているがどうか」と聞かれた真志は「取材のルールに添ってやってください」とだけ答えた。次長と課長はここまで見届けて署に戻った。寒さが厳しく外にいられないので全員が車の中で待つ。美和が持参したお茶類を真志が、警察と消防署の救急隊員に渡すと「警察は人を助けるのが仕事だから、当たり前のことをしているだけです」と若い駐在員が気を使わなくてもいいといった感じで言った。間もなく先ほど登って行ったレスキュー隊四人と山岳救助隊四人とが合流したので、担架に移して十五分ほどで広場に着くと無線連絡がある。

(八)

午後五時十五分、辺りが薄暗くなり始めたその時、沢のほうからザツ、ザツという重い靴音が聞こえて来る。見ると赤いレインパーカーを着た栄治が簡易担架に横たわってレスキュー隊員に搬送されて来た。栄治はフードを被り背中を向けていたので反対側に回り込んで覗き込む。「お父さん！」と美和が呼びかけると、気がついた栄治は顔を少し上げて「ああー」と一声力なく答えた。眼鏡はなく、頭に包帯が巻かれ血が滲んでいる。深い傷を負ってかなり衰弱しているように見えた。思わず「よく頑張った。もう少しだからな」と真志は栄治に声を掛けた。簡易担架から栄治を救急車の担架に移して寝かす。その時真志は右足を持ったが、見ると両足が異常に腫れパンパンになっているのに気が付いた。何故か手袋もしていなかった両手は凍りつくように冷たい。擦って温めようとしてみたが全く反応がなかった。

若い救助隊員から栄治の登山靴を渡される。ザツクは発見現場に置いて来たので、自分達の荷物と一緒に明後日取りに行くつもりだといわれる。今度はレスキュー隊員から足が腫れていてタイツがめくれないので

切っていいかなどと聞かれる。救急車内で隊員が負傷の程度をチェックする。この時、栄治の体温は三十二度まで下がっていた。「左足を動かせますか？」と尋ねられたとき栄治の左足がガタツと動いた。塩沢ドクタ―が栄治の顔を覗き込んで何か話しかけると栄治はそれに応答していた。美和が救急車に乗り込むことにした。静かに救急車は広場から林道を里に向かって走り出した。広場を去る前、真志の脳裏に走馬灯のように朝からの出来事が掠めていった。真志は振り返って山を見あげた。すっかり日が暮れて、そこには黒々としたシルエットが重なり合っていた。「今回だけは命を奪わずに返してやる」真志は山の魔性の声をはっきりと聞いた気がした。